

CARE ACTION やりがいたけしほ 限奥もう

4・22ケアアクション記者会見

—賃上げ財源はあるのに、現場に届かない実態—

4月22日、総評加盟の医労連、自治労連、福保労の3単産は、すべてのケア労働者の大幅賃上げを求め、現場の切実な実態を訴える記者会見を行いました。

冒頭、京都医労連の坂田書記長から、2023年から2025年にかけて全産業との賃上げ格差が18,918円にまで広がっている実態を報告。「2026年春闘でも同様の傾向が続けば、格差はさらに拡大する」と強い危機感を示しました。さらに、京都医労連加盟組織のうち、約6割（7組合/20組合中）が定期昇給のみ、または回答延期に留まっていると指摘。診療・介護報酬により3.2%（医療）～3.3%（介護・福祉）の賃上げ財源が確保されているにもかかわらず、多くの事業所で賃上げに踏み出せず、一時的な手当支給にとどまっている実態を明らかにしました。これでは、「現在の物価情勢や他産業の賃上げに到底追いつきません。10%以上の報酬引き上げを求めていく。」と訴えました。

京都医労連の春闘回答状況① 賃上げ・是正

T病院（京都市） ・ベア11,000円	T病院（京丹後市） ・ベア9,000円	I老健（宇治市） ・ベア2,000円
N診療所（京都市） ・ベア500円+手当3,000円	Y健診（京都市） ・ベア3,000円	事務組合（京都市） ・ベア2,300円



悼と反基地 ジレンマに

中絶容認をめぐり、京都府内各地で反基地の活動が展開されている。一方で、基地の存在が地域経済に与える影響も無視できない。このジレンマをどう乗り越えるかが、今後の課題となる。

京都新聞（4/23）に掲載



出典：※1_23～25春闘は厚生労働省「令和7（2025）年賃金引上げ等の実態に関する調査の概況」より
※2_厚生労働省「賃金引き上げ等の実態に関する調査の概況」より

★現場の切実な声★

続いて現場から4人が発言し、深刻な人手不足と低賃金の実態を訴えました。



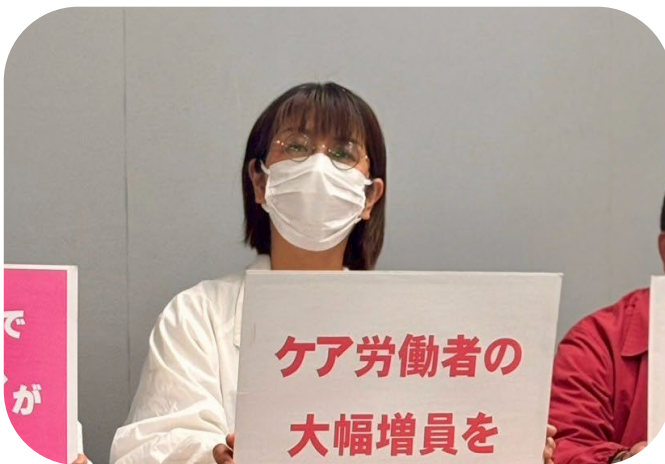
高雄病院労組の筒井さん

人員不足のなか、肩にシップを張り、腰にコルセットを巻いて、頑張って働いています。未来が見えなくても、“人が好き”だから続けている。国は報酬を出しづらないでほしい。



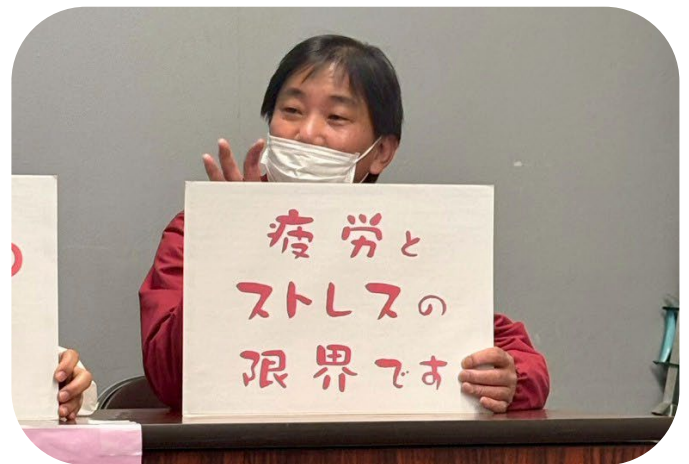
京都民医労西支部の河野さん

体が足りない。分身できたらいいのにな。本当はもっと寄り添ってもあげたのに、今の看護体制ではしてあげられない。他産業との賃金格差は拡がり、医療介護現場から離れていく。他産業と同等の賃金アップを。



市職労病院支部の太田さん

2023年、2024年と給与改定が遅れ、2025年は賃上げがありません。公的医療として、コロナ禍で市民のいのちを守ってきたのに、本庁の職員とは賃金が開くばかり。



福保労こぶし分会の川上さん

人がいません。“介護のような”仕事をさせられています。その人に寄り寄り添うという“介護”をしたい。介護労働者は運動選手と一緒に体力勝負。しかし体力的にも限界で、もう続けられないんです。だからやめていく。

参加者は、すべてのケア労働者に対する大幅賃上げと人員確保こそが、患者・利用者に寄り添うケアを実現し、医療・介護を守る最優先課題であると強く訴えました。

